

月の花挽歌 ～11. 月光川～

11-2

鴨鍋の食材を使った年越しそばを淡いブルーの色合いの『新庄東山焼』のどんぶりで、汁まで残らず食べた真紀は、「大変美味しゅうございました」と顔をほころばせて礼を言った。

旅館のフロントのバックヤードで仮眠がてら一夜を明かす拓哉に、鍋に小分けした年越しそばを奈美恵が運んで行ったのを機に、

「ご迷惑でしょうけど、帰って来て本当に良かったと思っています」と真紀は改まった口調で言って、朝子に頭を下げた。

「何よ、水臭いわね。私の目の黒いうちは、あなたの部屋はいつでも開けておくから、帰りたい時に帰って来たらいいのよ。変に気を回すのはやめて頂戴」と朝子はたしなめてから、

「お酒でも飲みましょうか」と大きな瞳で真紀を見つめて言った。

地酒の『銀嶺月山』を熱燗にして、『新庄東山焼』のぐい呑みで飲み交わした。

日本画家横田とのゴシップは、月山の麓にある小さな町にも届いているはずなのに、その話題には一切触れてこない事も、真紀はありがたかった。

「素敵なマフラーを皆にありがとうございます。忙しさにかまけてお礼を言いそびれていたわ」と朝子は地酒をひと口啜ってから、真紀が土産に持参した『ジョンストンズ』のカシミアマフラーの礼を言った。

紅白歌合戦は48番目のコブクロが『風』を歌っていた。

奈美恵が戻って来て、「あら、お二人だけで狡いわ。私も仲間に入れてください」と口元をほころばせて言いつつ食器棚からぐい呑みを取って来る。

「お土産のお礼を言っておきましたからね」と朝子はお酌をしてやりながら伝えた。

「今さっき蓋を開けて、拓哉さんと一緒にマフラーを巻いてみたところですよ。もったいなすぎて箱に戻しておきました。仙台に出かけた時にでもしようねって決めました」と奈美恵は礼を言う代わりに、夫婦のやり取りの話を聞かせた。

「女きりで酒盛りするなんて、初めてじゃないかしら？それも年が明けようとしている時間に！」と朝子は新発見でもしたかのように得意げに言った。

「拓哉さんひとりが貧乏くじを引いてしまったようですね」と真紀が軽口をたたいた。

「これからやり残したおせち料理の仕込みをするそうです」と奈美恵が同調する。

「板場の腕も上げてくれているので、頼りきりなの」と朝子は言って、目を細める。

テレビでは大トリの2曲前となるスマップが『ありがとう』を歌っていた。

「いつになく穏やかな年の瀬になったわね。新年を迎えるのに薄ら雪化粧しかできないでいる月山は、何だか彼らしくないわ」と徳利を傾けながら朝子はいくぶんはしゃいだ顔つきで言った。